

寺内大吉・旅行商売潜行記

検印略

寺内大吉・旅行商売潜行記

著者 寺内大吉

定価 480円

発行者 松田 清

発行所 日本交通公社

東京都千代田区丸ノ内1-6-4

振替 東京 29403

印刷所 祥美印刷株式会社

初版発行 昭和45年 3 月10日

寺内大吉・旅行商売潜行記

はじめに

無類の旅行好きだ。ただし世にいう観光趣味、名所旧蹟あさは御免候である。単純な放浪癖でもあろうか。

とにかく東京育ちのぼくが、盛夏の甲子園へ野球見物に単身東海道線に乗りこんだのは小学校六年生のときであった。大阪に親戚があつたとは言え、自分の子供には到底真似させることのできない無謀さだ。

旅に出ても快眠、快食、快便。

自宅にいるよりは遥かに健康的である。三界これわが棲家すみかというところか。風邪なぞをひいていても旅行してくると全治して帰ることがしばしばである。

そんなぼくに昨年、雑誌「旅」がさまざまな観光職種へ潜行する仕事を与えてくれた。まことに楽しい毎月であった。

潜行——内容は必ずしもこのタイトルにこだわらないものになったが、こうした職種をいささか内側から探索はできたと思っている。

まだまだ観光職種は沢山あるだろうが、ぼくの狭い体験内での結論は、ここで働く人たちがまだまだ労多く酬われるものが少いということであった。

なお「写真師」と「番頭」は雑誌「旅」では未発表の原稿である。

目次

記念写真屋の見た人生模様

馱弁に賭けた男の一生

安来節にひそむ造反精神

マンモス・ホテルのメイド学校

羽黒山での山伏修業瀬戸内航路の一日船長376389113139

人力車夫の優雅な生活

.....

165

水神に祈る天龍下り

.....

189

酒豪の国の酒づくり

.....

213

“湯もみ”で知る草津の哀歓

.....

237

なまはげの来る男鹿の駅長

.....

261

旅館の番頭とお客百態

.....

289

カット

おおば比呂司

著者略歴

本名成田 有恒（なりた ゆうこう）。

大正十年十月六日、現住地世田谷区世田谷に生まれる。生家は大吉祥寺という浄土宗の寺院である。

東京府立六中（現新宿高校）から大正大学に学ぶ。卒業とともに生家の住職となる。

学生時代はスポーツばかりやっていた。大学半ばで身体をこわし、スポーツを断念。志を小説に向けた。

幾つかの懸賞小説に入選したあと、司馬遼太郎と同人誌『近代説話』を発刊。黒岩重吾、伊藤桂一、永井路子、尾崎秀樹らが加わってくる。

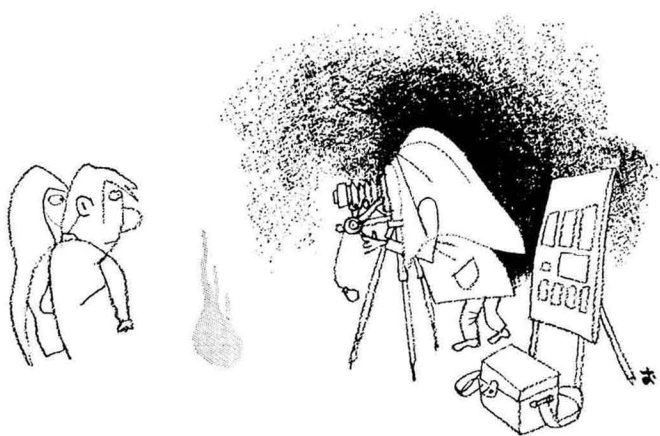
三十六年「はぐれ念仏」で第四十四回直木賞を受賞。「はぐれ念仏」（文芸春秋社刊）や「名なし如來」（講談社刊）などの短編集がある。長篇は「歓喜まんだら」「人買い次郎」（桃源社刊）など。最近はスポーツ評論やラジオ、テレビの仕事も多い。キックボクシングでは創始以来解説をやっている。

とにかく生涯をかけてレジャーの本質をきわめたいと念じている。

写真撮影

加藤悦二・柏原破魔子・他

記念写真屋の見た人生模様



遺 影

女王とその随行カメラマン。

新婚旅行の二人づれはまさにこれである。グリーン車に乗りこめば花嫁はポーズのとりっぱなし。新郎はレンズを覗きっぱなしだ。ろくな美人でもない女房を、なんであんなに撮影しなければならぬだろう。

ジャカルタで出会ったインドネシアの若者は、ずばり言った。

「日本の女の人、なんにもしないね」

彼は四年間、東京に留学していたそうである。

「一寸待て。日本の女性ほど働き者はいないんだぜ。亭主によく仕え、部屋を掃除し、せっせとお料理をつくる」

「そっちの話じゃありません。ベッドのなかでのことよ」

「ああ、その話かい。たしかに、たしかに何にもしないなあ」

ぼくは何度もうなずかなければならなかった。

ポーズのとりっぱなし。だから亭主はうろうろと彼女の周囲をうろつきまわるのである。

話がそれた。

必ずしも日本男児が過剰サービス屋ばかりとは限らない。好きなのである。カメラが大好きなのである。こまめに、うちよるとスナップがとりたい。

全くあきれる。結婚式にでも出席して見給え。どこの一族にも必ず一組や二組はカメラ狂がいる。神主さまがノリトをあげる間もネズミのように動きまわる。

「ただ今から新郎新婦によってウェディング・ケーキにナイフを入れます。撮影をなさる方はお集り下さい」

披露パーティーで司会者はそつなくこんな台詞せうごを口にする。どつと集まる両家のカメラマンたち。

まるで彼らのために新郎新婦はケーキを切るようなものである。

サングラスをかけて肩からはカメラを。

海外の街で見かける日本人旅行者の風俗である。

いや、こんな毒舌、じつはぼくのひがみである。この年になって、まだカメラをいじることができないからである。

スペインからフランス、イタリイと旅してきたことがあった。七十枚どりのフィルムを、一本

だけ全部消化して帰国した。約四十日間の滞在で、七十スナップだけをうつしてきたわけだ。

娘に写真屋へ持たせた。現像させるためである。

約束の日限、学校の帰りに写真屋へ寄ってきてくれた娘は、憤然として言った。

「お父さん。写真屋さんが言ってたわよ。せっかくお撮りになるんならもう少しご丁寧に、ですって」

七十枚のなかで満足に写っていたのは八枚だか九枚。あとは全部まっ黒けのけ。

メキシコ砂漠を眼下に見おろすジェット機の旅。ハイウェイがひとすじ走る眺めが見事であった。早速ジェット機の窓からばかり。

これも駄目。翌年アメリカへいったときである。

佐世保軍港の夕暮れ。九十九島海に三隻の航空母艦がうかんでいた。艦載機を満載している。

ただし日本の艦艦ではない。アメリカ第七艦隊。

さっそくレンズを向けた。

ただしである。九十九島海を見おろす佐世保市の何とか山だ。頂上に十円玉を入れると効力を発する望遠鏡があるだろう。その望遠鏡にカメラのレンズをぴったりと合せて写したのである。

全然写っていないかった。

とにかくカメラにかけてはオンチもオンチ、そのぼくがプロ中のプロである写真師になるというのである。およそ馬鹿げた話ではないか。

だが仕事である。ぼくはいそいそと熱海へ出かけていったのである。

2

だが現場のお宮の松に到着するまで、じつはぼくも疑ぐつていた。ぼく一人を除いて、およそ日本の男性はすべて写真がうつせる。こんな時代に観光写真などという商売が成立するのか。お宮の松のあたりにそんなプロ写真師が現存するのだろうか。

ところが盛況とは言わぬが、ちゃんと商売は成り立っていたのである。

お宮の松に九名。錦ヶ浦で一名。プロは生きていた。

それもぼくが到着したとき、数名の関西方面からきた観光客がおとなく整列し、写真屋さんほ例の三脚をおっ立て、黒い布のなかに首を突っこみ、

「さあ皆さん、此方をこちらになつて。一寸の間まばたきをしないで下さいよ」

ばかり、と商売をやつてござつたのである。

「まさかあんたたち、綺麗な写真も添えて売るんじゃないでしょうね」

と、ぼくは疑念をさしはさんだ。

「綺麗な写真って何ですか」

生真面目そうなおっさんが眼を光らせて聞きかえしてきた。

「ほら香港のビクトリア・ポイントなんかによくあるやつですよ」

ほんとうである。香港島のビクトリア・ポイントへ登ってごらん。そこに二、三人、写真屋さんがいるよ。うるさく付きまといってくる。

「俺はここにちゃんと持ってるんだよ」

と肩からさげたカメラを示すと、相手はにやにや笑いながら、小さなカラーのスライド写真を手渡してくる。

おお、ミス香港。両脚をひろげた妙なるポーズ。

それを説明したら頭ごなしにやつつけられた。

「冗談じゃない。私らは氏素姓の正しい芸術家ですぞ」

まいった。まいった。ここにいる写真屋さんたちはみんな誇り高き男であった。

いや、写真屋さんなどと呼ぶこと自体が間違っているのである。

先生である。記念撮影の先生であった。

諄々^{じゅん}と歴史を説いて聞かされた。

伊豆半島の記念先生の歴史は下岡蓮杖さんからはじまったという。

黒船がきた下田港にいたこの名人こそが、記念撮影の鼻祖^{ひそ}であったそうだ。明治末期から大正期へかけて大活躍をした先生。

一寸待つて下さいよ。その蓮杖先生よりずっと前にすでにいたんですよ」
とぼくは異議をとなえた。

カメラ機械にかけては全然オンチだが、こちらはいささか本を読んでいる。

西郷隆盛が薩摩で私学校の先徒をひきい、叛乱したのが明治十年。この翌年、伊豆の熱海にはちゃんと記念先生が実在していたのである。

天田久五郎という。福島県は平、安藤対馬守藩中の武士である。

久五郎がプロの写真師となるまで、まこと数奇な人生行路をたどってきたので少しくそれを紹介しよう。

3

明治戊辰^{ぼし}の戦乱。江戸を無血占領した京軍は（ぼくの資料では官軍などと書いていない。京軍

である）奥羽同盟の諸藩を征討すべく兵を二手に分けて攻め下ってきた。会津若松をねらう東北道。さらには列藩同盟の本拠仙台をつく陸前浜街道軍だ。そしてこの常磐攻略軍は海陸から平城へ殺到した。

十五歳になる天田久五郎も大いに京軍と戦った。だがじきに平城は落城。久五郎は敗亡して仙台へ逃げた。

だが大勢はいかんともしがたい。彼は五稜郭ごりやうかくでなお抗戦する仲間と別れ、焼土の平へ帰った。戦乱の渦中で消息を絶った母や妹にめぐり遇うためだった。

ところが、よう（杳）として判らない。あちらへ逃げた。こちらで見かけた。そんな噂を耳にするたび、久五郎はすっ飛んでいった。だがどこも幻影ばかり。

もうこうなれば意地である。生涯を投げだしても必ず骨肉こつにくと再会するぞ。

まこと天田久五郎にとってこれが人生の大事業とはなった。

江戸へ出て、山岡鉄舟の知遇を得て、勉強にいそしんだ。官途かんとに就くチャンスもあつたが、彼はこれを振りきった。明治十年、西南の役が勃発したところ、久五郎は浅草に江崎礼二という人の門を叩いていたのである。この江崎氏は当時の日本における唯一人の写真師と聞いていたからだ。

久五郎は江崎門で数カ月、写真撮影の技術を身につけた。そしてひとわたりの機械を買いこむと、相州の小田原へやってきた。

訪れる観光客をとらえては記念撮影をすすめる。ついでに母や妹の消息を聞きたたすのであった。

写真機一台持って全国を歩きまわっていれば、いつか必ず骨肉とめぐり遇えるだろう。さらにそれまでの米塩の資にもことは欠かぬ。いわば一石二鳥のねらいであった。

やがて久五郎は熱海へやってきて、そこに住みついた。まだお宮の松はなかったが、海岸を職場とした。明治十一年である。

「ふえーそんな時分から私たちの先輩が、ここにいたんですかねえ」

昭和の記念先生たちは眼を丸くしてぼくの話に聞き入った。

「それで、この熱海でさがしているおふくろさんや妹さんに出会えたんですか」

「駄目なんだなあ。さっぱり消息がつかめない。そのかわり久五郎は妙な男と知り合ったのさ」

「妙な男って誰ですか」

「清水の次郎長さ」

「次郎長って……あの次郎長ですか」